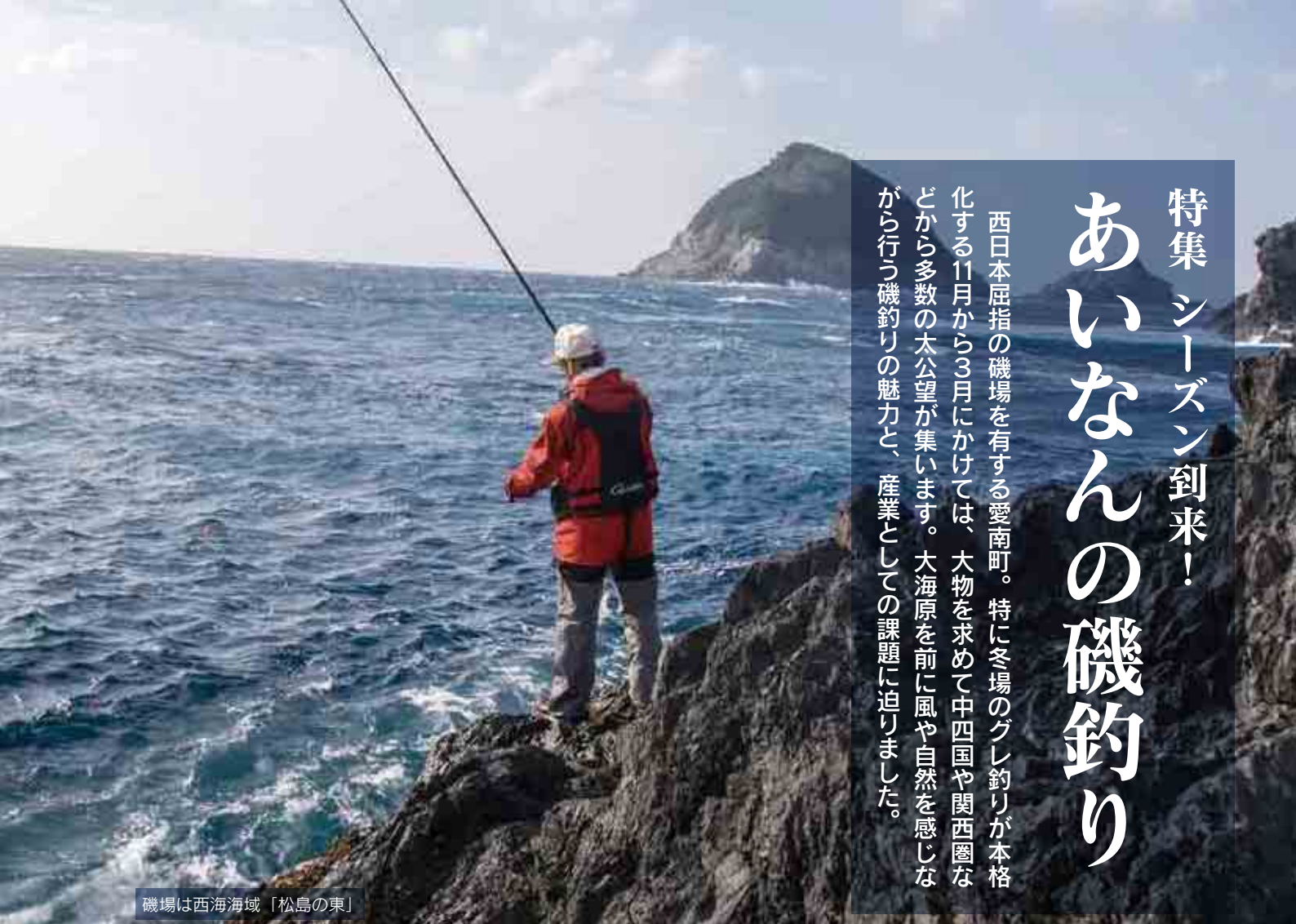


特集 シーズン到来!

あいなんの磯釣り

西日本屈指の磯場を有する愛南町。特に冬場のグレ釣りが本格化する11月から3月にかけては、大物を求めて中四国や関西圏などから多数の太公望が集います。大海原を前に風や自然を感じながら行う磯釣りの魅力と、産業としての課題に迫りました。



磯場は西海海域「松島の東」



一級磯と呼ばれるナガハエ。切り立った地形が特徴です

出港は夜明け前

秋祭りを終えた11月4日、西海の中泊港は夜明け前にも関わらず、磯釣りの準備をする人や渡船のエンジン音で賑わっていました。

「今日は北西の風が強いから、風下になるところに降ろしていくよ」。そう話すのは、こだま渡船の船頭を務める吉田昌宏まさひろさん。4年ほど前に町職員を退職し、父から渡船業を引き継ぎました。



船の係留など、作業は基本的に一人で行なっています



船を操縦する吉田昌宏まさひろさん。「海が好きなので仕事が楽しい」と話します



正岡さんが渡った磯は断崖絶壁。
荷物もわずかなスペースに置きます



磯釣り歴は40年ほどになる正岡圭二さん。
愛南町に向かう道中でも釣りのことを考えています

自然との触れ合いが魅力

午前6時15分、中泊港を出港した船は15分ほどでこの日の磯場となる松島に到着しました。こだま渡船に乗船したのは松山市在住の正岡圭二さん。月に2回ほど磯釣りのために愛南町を訪れています。

「荒々しい自然との触れ合いが磯釣りの魅力。磯では色々なことを考えられるし、気分転換にもなります」と話します。自分を客観視でき、日常生活の反省をしたり、仕事に対する新たなアイデアが浮かぶこともあるそうです。

安全第一を心掛け

「足元に気を付けて！」という声スピーカー越しに響きます。お客さんを磯場に渡す際、危険がないように吉田昌宏さんが声を掛けます。

福浦で山洋渡船の船頭を務める山川昭彦さんも、「お客さんの安全が一番。地域の業者同士で横のつながりもあり、連絡を取り合って海の状況を共有しています」と説明します。

狙いはグレやイサキなど

磯釣りの対象となる魚は、グレを中心にイサキや石鯛、真鯛、ハマチなど多岐にわたります。釣り人はそれぞれに自分の好きな魚があり、それを狙って仕掛けなどを用意しています。

イサキ狙いの正岡圭二さんは、「イサキは食べても美味しーいし、近所にあけても喜んでもらえる」と言い、「浮きが海に沈むあの瞬間というのは、他では味わえない感覚」と熱く語ります。



磯に渡る際には慎重に船を着岸させます。
安全確保のために細心の注意を払います



山洋渡船の無料仮眠所。
磯釣りのお客さんは予約して使用することができます



写真左から取材に協力いただいた
石川武夫さん（徳島県）、正岡圭二さん（松山市）、
松澤正孝さん（久万高原町）



この日は風が強く午後1時過ぎに帰港。
通常は午後2時頃に納竿となります

産業としての課題

渡船業や民宿など、磯釣りに関連する産業の多い愛南町。こだま渡船で民宿を営む吉田文代さんは、「磯釣りのお客さんは以前に比べて減ってきている」と話します。

中泊で渡船業を営む中田末光さんは、「魚の絶対数が減っているし、ジギングやルアー釣りなど釣りも多様化して、手軽な釣りを好む方が増えている」と分析します。渡船業者から磯釣り客用のお弁当を受注している楠葉卷子さんも、「よそから来るお客さんは、この磯は最高と言います。もう少し来てもらえたら良いですね」と話します。



施設を案内する吉田文代さん。
民宿を営んで50年近くになります



イシダイ、タマミ、グレ、ヒラマサ…
こだま渡船の各部屋には魚の名前が使われています



お客さんを見送った後、船を洗浄する吉田昌宏さん。
おもてなしのために手入れを欠かしません

振興のためのアイデア

柏崎で渡船業と民宿を営み、自らも磯釣りが大好きだという松本明義さんは、「磯釣りをする人は高齢の方が多くなってきているが、若い人たちにもっと来てもらえたら」と話します。

愛南町の観光地である「石垣の里外泊」の隣に位置する中泊には、磯釣り客だけでなく、特に夏場には多数の観光客が訪れます。磯釣り愛好者が家族を連れて観光することもあり、自身も家族を案内したという正岡圭二さんは、「愛南町には磯釣りという素晴らしい文化があり、同伴者も観光で楽しめる。このことをもっと情報発信することで、集客促進ができるのではないか」と提案します。



磯釣り用の渡船が並ぶ中泊港。現在は7件の渡船業者が営業しています

大物を求めて

日本記録級であるという71cmのグレの魚拓を前に松本明義さんは、「グレは3年ほどで25cm位になりますが、その後は年に1cmほどしか大きくなりません。大物は貴重なんです」と説明します。

中田末光さんは、「大物が釣れにくくなった今でも、愛南町では60cmオーバーの尾長グレが釣れており、その魅力はある」と言います。



みなとや渡船に飾られている魚拓。
松本明義さんが自作しています



山洋渡船に飾られてる魚拓。
70cm近い石鯛が目を引きます

磯釣りを盛り上げて いくために

愛南町の各渡船組合などが組織する愛南マリンイベント実行委員会では、年に1回、「あい



西海南部渡船組合 組合長 (山洋渡船) 山川 昭彦さん
「西海南部は南に位置し、潮変わりが良く、地理的に北西の風にも強いです。安全第一でご案内します」



中泊渡船組合 組合長 (こだま渡船) 吉田 昌宏さん
「観光地の外泊の近くなので、観光も兼ねて楽しめます。その日の海の状況を見て最適の磯にご案内します」



内海渡船組合 組合長 (みなとや渡船) 松本 明義さん
「由良の磯は風裏が多く、北西の風に強いので冬場も安心です。よく釣れますよ」

愛南町の磯釣りに関するお問い合わせや、渡船業者、民宿、釣具店のご案内は、
愛南町観光協会(電話番号…
08951731044)までお気軽にお問い合わせください。

なん磯釣り大会」を開催するなど、情報発信や新規顧客の獲得に努めています。山川昭彦さんは、「若い人が釣りに興味を持つてくれるかどうか。僕らだけではどうこうできない部分もあるが、安心安全と親切な対応を心掛け、喜んでもらえるようにサービスを充実させたい」と力強く話しました。

専門家の視点から

寄稿：公益財団法人日本釣振興会愛媛県支部 支部長 (つり天国 代表) 白石 勝久

愛南町は釣り人憧れの場所

なんと言っても愛南町を有名にしたのは昭和30年代末期～40年代に始まった巨グレ(尾長メジナ)ブームである。県下の釣り人はもとより、香川・徳島・関西・九州方面から南郡詣でが始まり、多くの釣り人が城辺や中泊・武者泊へと60cm～70cm以上の巨グレを求めて通ったものです。その後、由良半島でも巨グレが爆釣し、ますます熱狂しました。毎年のように日本記録が釣れていたものです。当時は道路が悪く松山から4時間～5時間、徳島・香川からだ7時間～8時間もかけて通っていたのです。釣り人の情熱たるものは計り知れないものがあります。

昭和45年頃だったと思うのですが、カラス貝で石鯛が爆釣したため、上物、底物ともに一気に釣り人が増えていきました。このブームで釣具メーカーも製品開発に力を入れ、竹竿からグラスロッド、そしてカーボンロッドへと進歩してゆき、リールも大物に対応できる商品が開発されていきました。愛南町はその後、バブル期に第三次磯釣りブームが訪れ今日に至っています。

釣り人も愛南町の経済効果に少しは貢献したと思われませんが、ただ傍目からは資源の破壊と見る人が多いのも事実です。また、釣り人の家族は渡船代、エサ、釣道具などお金をかけるより魚を買った方が安いと何時も言っていますが、それでも本人は釣りが楽しくて仕方がないのです。双方が歩み寄っていくためには、今後、日本釣振興会と釣り人が一緒になって、放流・釣場の整備などの活動を通して自然を未来に残していくことも行っていきたいと考えています。愛南町の磯は計り知れないほど大きな魅力を持っています。

最後に私の提案ですが、由良の沖釣り、地釣り、中泊のノコギリ、中バエ、武者泊のヤッカ、アブセ、(釣り人憧れの日本有数の名磯で)今でも60cmオーバーの巨グレが毎年上がっています。この磯は釣り人だけが楽しむのはもったいないと思います。観光船を出して、釣り人の家族はもちろん一般の観光客も乗せて磯めぐりをするなど、また鹿島の活用なども検討してもらいたいものです。